

山の田の孝女 こうじょ



夏の夕ぐれです。洞光院どうこういんのかねの音が、「山の田」のすみずみにまでひびきわたっています。ますます赤みをました太陽が、なごりおしそうに山の端はにしずんでいくのを、さきほどからおさよは、ぼんやりとながめておりました。

「おさよや、おさよ。」

お母さんのよぶ声に、おさよはふとわれにかえりました。

「はあい、おつかさん。」

すっかり暗くなったおくの部屋で、お母さんはひっそりとふせていました。

「おさよ、すまないが体をさすってくれないかい。一日中こうして横になっ

いと、体のふしぶしがいたくつてね。」おさよは、すっかり小さくなったお母さんの体を、やさしくさすってあげました。

「すまないねえ。おまえにすっかり世話をかけてしまつて。お父さんさえ元気でおられたら……。お父さんがおなくなりになり、こうしてわたしも病気になるてしまつてから、あれほどたくさんあつたおよめ入りの話も、もうこのごろでは、すっかり聞かれなくなつてしまつた。年ごろのむすめだというのに。」

「おつかさん、いいのよ。わたしのことなど心配しなくても。それより、早く元気になれるといいのにね。」

おさよは、いつそうやさしくお母さんのせなかを、さすってあげました。



辺りは、すっかり暗くなりました。さきほどまで、あんなにさやさやと鳴っていた竹やぶの竹も、まるで、ねむってしまったかのようです。

ブーン、ブーン。

暗やみを待っていたように、一ぴき二ぴき……十ぴき……。『山の田』の湿地からわき出たおびただしい蚊が、二人をめがけてせめよせて来ました。

「また蚊が。今夜もねむれそうもないねえ。わたしのことなどかまわず、ねむっておくれね。」

「おつかさん、心配しないで。いつものように、わたしがうちわであおいであげるから、ゆつくりやすんでくださいね。」

（ああ、せめてかやがあつたら、おつかさんも楽にねむることができのに。）
びんぼうで、かやも買えないおさよは、つぶやきながらあおぎ続けるのでした。

こんな夜が、いく夜も続きました。お母さんの体はますますやせおとろえ、声もかすれ、おさよに話しかけることも少なくなりました。さすがに、おさよも、つかれきつてしまいました。

（どうしたらいいのかしら。もうわたしの力ではおつかさんを助けてあげることはできない。）



「どうぞ、おしゃか様。病氣のおつかさんをゆつくりねむらせてあげてください。そして、早く病氣を治してあげてください。」

と、一心においのりをしました。

その日から、おさよは、毎朝洞光院にお参りに出かけるようになりました。

「感心なむすめだのう。何と親思いのむすめだこと。」

一日も欠かさず、お参りを続けるおさよのすがたは、村中のうわさになるほどでした。

（そうだわ、おしゃか様におすがりしてみよう。）

思いたったおさよは、あくる朝早く、朝つゆで足元をぬらしながら、うらの竹やぶの小道を登っていききました。小道を登りきったところに、おしゃか様のまつられた洞光院があります。



ある夜、いつものように、おさよは、うちわであおいでいるうちに、お母さんのまくら元でうつらうつらと、ねむりこんでしまいました。

気がつくと、夢まくらにおしゃか様が立っておられます。

「これこれ、おさよ。」

と、右手をさしのべながら、おごそかにおさよをおよびになりました。

「あ、おしゃか様。」

おさよは、自分の声に目をさまし、おやど、首をかしげました。お母さんは、おだやかなね息をたてています。あの低い羽音も聞こえず、部屋は静まりかえっています。

「蚊がいない。一ぴきもない。おしゃか様が……。」

おさよの、必死のいのりが通じたので

しょうか。この日からうそのように蚊がいなくなっていました。

そのうえ、あれほど重かったお母さんの病気も、少しずつ快方に向かい、稲の穂が実るころには、すっかり元気になりました。

毎年蚊になやまされ続けてきた村の人人も、

「あの親孝行のむすめのおかげだ。」

「おしゃか様が、むすめの願いをおききくださり、蚊を一ぴき残らずたいじしてくださったのだ。ありがたいことよ。」と、口々に喜び合いました。

秋の夕ぐれです。洞光院のかねの音が、「山の田」に、今日もひびきわたります。畑仕事の手を休め、おさよは、そっと手を合わせるのです。